熊本大学教育学部紀要
第63号, 213－219, 2014

イタリアにおける幼児・児童の歌唱活動に関する調査報告

― フィレンツェ市の事例を中心に ―

中　原　雅　彦・志　民　一　成*

A Research Report on Children's Singing Activities in Italy

― Through the Case of Florence City ―

Masahiko NAKAHARA, Kazunari SHITAMI *

（Received October 1, 2014）

Key words : イタリア，フィレンツェ市，幼児，児童，幼稚園，歌唱活動，街の鍵，オペラ

はじめに

本稿は，2014 年 3 月にイタリア・フィレンツェで行った幼児・児童の歌唱活動に関する視察の調査報告である．イタリアを調査対象とした理由としては，オペラの発祥の地であり，いわゆるベルカントという高度な歌唱芸術を花開かせた歴史を持つ国であるということが第一に挙げられる．

もう一点は，学校音楽教育を含めた音楽教育事情が挙げられよう．イタリアでは，音楽は音楽院や個人で師について学習するのが一般的であり，日本でいう小学校に相当する Scuola elementare 以上の義務教育機関では，学習指導要領に相当する Programmi で音楽がカリキュラムの中に位置づけられているものの，日本の音楽の授業とはかなり状況が違っているようである．中嶋（1997）が「イタリアでは古くから教会や劇場で音楽文化をはぐくみ，（中略）一方，町の広場では人々は個々のやり方で音楽を楽しんできた．そのため学校という枠の中で音楽教育の存在は希薄であった[1)]」と述べているように，音楽教育の在り方そのものが日本とは大きく異なるといえよう．

では，幼児期の教育機関である Scuola dell'Infanzia では，子どもはどのような音楽の活動，特に歌唱活動を行っているのだろうか．基本的に Infanzia は「児童」，Scuola は「学校」を意味するが，日本の幼稚園に相当すると考えてよい[2)]．

今回は，フィレンツェ市において，この Scuola dell'Infanzia（以下幼稚園）および，小学校以上の子どもが参加している課外活動の視察を行ったが，これらの報告を通して，イタリアにおける幼児・児童の歌唱活動について，その特徴を明らかにしながら，日本での歌唱活動，ひいては声を育てる教育の在り方への示唆を得ることを目的とする．

1. フィレンツェ市における幼稚園での歌唱の取り組み

フィレンツェ市には 29 の市立幼稚園があるとのことだが，今回，視察を行った幼稚園は，フォルティーニ幼稚園，ヴィットーリオ・ヴェネト幼稚園，ロダーリ幼稚園の 3 園である．対象年齢は 3 歳から 5 歳の 3 年保育となっている．1 クラスの構成は，いずれもおよそ 25 人程度であるが，フィレンツェ市独自の取り組みで，近年，年齢の違う子どもを混ぜた異年齢混合のクラス編成となっている．

もう 1 つの特徴としては，フィレンツェ市の全ての幼稚園では，個々にテーマを設定していることである．このテーマは 2・3 年のサイクルで変えるようだが，そのテーマによって，各園の音楽活動の内容にも少しずつ違いが出ているようである．

音楽の活動はいずれの園も週に 1 度，1 クラス 30 分行われていたが，外部から派遣されている音楽指導教師が中心となり，担任の 1・2 名の教員がサポートをするという指導体制がとられていた．フィレンツェ市では，音楽院や教員養成校を卒業した，市に登録している音楽指導教師を幼稚園に派遣するという制度を設けているとのことであった．

活動内容は音楽指導教師の裁量により大きく異なるが，市に登録している音楽指導教師は，所属する組織の毎月行われる会議で，活動や指導内容を互いに報告

* 静岡大学教育学部　Faculty of Education Shizuoka University

しあい，教育実践についての意見交換等を行っているとのことで，使用教材や指導方法には共通点が多々見られた．例えば，活動の導入部で歌う挨拶の歌や，活動の最後に歌う終わりの歌などに，同じ歌を用いていたり，マラカスやクラベス等の共通の楽器が使われていたりした．

また，どの幼稚園にも教育専門家（Pedagogista）がいるが，今回の視察では，彼らから園の特徴や活動内容などについて説明を受けることができた[3)]．

1）フォルティーニ幼稚園（Scuola dell'Infanzia "Fortini"）の例

（1）園の概要と音楽活動の指導者

フォルティーニ幼稚園はフィレンツェ旧市街から少しなはれた，経済的に比較的裕福な家庭が多い地域にある．この幼稚園の年間テーマは「お客さま Ospite」である．家族や近隣の小学生が来園する際にお客さんとしてもてなしたり，また，給食の時間に他のクラスの子どもに手紙を出して招待したりするといった活動を通して，社会性を培おうというねらいがあるようである．

この園では，イタリアの音楽院を卒業した男性が音楽の授業を行っていた．音楽院ではサクソフォンを専攻をしていたようである（図 1）．

（2）音楽活動の概要

教室に円形に並べられた椅子に，指導者と子どもが座って活動を行っていた．まず導入の部分では，挨拶の歌で活動が始まったが，歌詞は以下の通りであった．

1 番，Ciao a tutti Bentrovati cominciamo la lezione, Bella musica ci diveritiremo, Si!,

2 番 Ciao a tutti sono ○○（名前）

1 番は，「皆さんこんにちは，レッスンを始めましょう，綺麗な歌を楽しみながらね，はい！」と始まり，2 番では，「皆さんこんにちは，私は○○です」と，並んでいる順に挨拶しながら自己紹介をしていくという内容になっている．

図 1．フォルティーニ幼稚園にて
（右端が音楽指導教師，左が園の教育専門家）

中間部では，音楽と言葉を用いた遊びや音楽ゲームなどを行っていたが，音楽の変化に合わせて手拍子をしたり，歩くといった活動が印象的であった．また，「晴れ」「曇り」「雨」などの天気の絵が描かれたカードを並べ，指名された一人の子どもが指し示したカードを見ながら，マラカスやボンゴ，クラベスで異なるリズムを鳴らすという活動も見られた．

最後には，簡単な終わりの歌を歌ったりしているようだが，この日は視察に来ている我々に日本の歌を歌って欲しいとのリクエストがあり，我々は唱歌《ふるさと》を歌ったが，これも「お客さま」というテーマを意識したものであると思われる．

（3）歌唱活動の特徴

この園の歌唱活動の特徴としては，子どもの声が自然に出るような試みが随所に見られるとともに，言葉のリズムを大切にしているように見受けられた．具体的には，日本の教育現場でしばしば見られる「大きな声で」や「元気に」といった言葉掛けは一切なく，子どもの自発的な歌唱を尊重しているように感じられた．また，イタリア語のアクセントや母音を活かすよう心掛けていると思われる活動が見られたが，このことについて，音楽指導教師は「幼児だからといって，教員側にはしっかりとした音楽の素養が必要だと考える．具体的には，音楽と言葉は切り離せないところがあるので，韻律学を用いて言葉のリズムなどにも注意を払っている」と述べていた．

なお，園内を案内してくれていた教育専門家によると，この園では，異年齢の子どもを混ぜることによって，3 歳児の言葉等の発達が促されたり，年長児が年下の子どもの面倒をみたりすることで，年長児自身の成長にも良い影響があるという．また，以前は同年齢同士のいじめもあったが，異年齢混合のクラスになってからは減少したということであった．

2）ヴィットーリオ・ヴェネト幼稚園（Scuola dell'Infanzia "Vittorio Veneto"）の例

（1）園の概要と音楽活動の指導者

ヴィットーリオ・ヴェネト幼稚園はフィレンツェ旧市街内（ユネスコ世界遺産）にある幼稚園である．この学校のテーマは「国際的 Internazionale」だが，この園の教育専門家は，園に通う子ども達の中に在伊外国人を両親にもつ者が比較的多いということを，その理由として挙げていた．

この園でも，イタリアの音楽院を卒業した男性教師が音楽活動の指導を行っていたが，音楽院ではコントラバスをはじめ多くの楽器を学んだとのことであった．

(2) 音楽活動の概要

この園でも，導入の挨拶の歌で始まり，中間部では言葉や手拍子，楽器などを使ったリズム遊びや音楽ゲームを行い，最後には終りの歌で締めくくられていた．歌唱活動では，音楽指導教師は主にギターを伴奏に用いていた．

中間部で行っていた「物探しゲーム」について，ここで少し取り上げたいと思う．ある子どもが隠した宝物を他の子どもが探すのだが，その時，隠し場所を知っている子ども全員が，教師のギターに合わせて《ピンクパンサーのテーマ》の旋律を歌う．宝物から遠いと小さな声で歌い，宝物に近づくと歌声を大きくして，探している友達に宝の在り処を教えるというゲームである．音楽指導教師は音の強弱を自然に体感させて，子どもが認識できるようにするということを意図していると述べていたが，ゲームで楽しみながら音楽の要素を感じ取らせることをねらいとしていると思われる．

(3) 歌唱活動の特徴

この園で指導している音楽教師は，無音や小さい音に対して意識を向けさせるような指導が随所に見られた．また，子ども達が活動で盛り上がった勢いのまま，がなり声で歌った際に，音楽教師が「叫んだら教室が爆発しちゃう」と声を掛けるなど，歌声についても，かなり配慮しているように感じられた．具体的な指導内容でも，ギターの各弦を家族に見立てた歌を歌った際，「低い音はパパ」のように弦の音の高さに合わせて家族のキャラクターを当てはめ，自然に声の出し方を子ども達に工夫させるような指導が見られたことは，大変印象的であった．

3) ロダーリ幼稚園（Scuola dell'Infanzia "Rodari"）の例

(1) 園の概要と音楽活動の指導者

3 園目のロダーリ幼稚園は，フィレンツェ旧市街から少し離れた新興住宅地にある幼稚園で，いわゆる中間層の市民が多く暮らす地域である．この園のテーマは「アイデンティティ Identià」であるが，自我が芽生える年齢ということを意識してのことだという．

この園では，ハンガリーの音楽院を卒業した在伊ハンガリー人の女性教師が音楽の指導を行っていた（図 2）．また，この園では，音楽等の活動用に別の空き教室を活用していた．

(2) 音楽活動の概要

この音楽教師の行う音楽活動が，先に視察した 2 園の活動と大きく異なっていたのは，毎回テーマを設定し，そのテーマに沿って 30 分程度の活動の内容を統一していたということである．本来は 1 日に行う 4 クラスは，全て同じテーマのものを実施するのだが，我々の視察を受けて，「森」や「海」など全てのクラスで違うテーマの活動を行ってくれた．

例えば「森」をテーマにした活動では，音楽活動をする教室を森に見立て，教室から列になって歌を歌いながら森に向かったり，「海」のテーマでは，折り紙の船を浮かべた薄い大きな布の下に子ども達を入り込ませ，深海にいる様子を演出するなど，活動のテーマに対するイメージを子ども達が十分に広げられるような様々な工夫が見られた．また，イメージさせたことを絵に描かせたり，紙の箱の中に穀物（米や豆など）などの自然物を入れて作ったマラカス等の楽器（図 3）を，活動に取り入れるなどしていた．

またテーマに合わせて，サン＝サーンスの《動物の謝肉祭》より「水族館」や，ヨハン・シュトラウス 1 世の《ラデッキー行進曲》などの鑑賞曲が効果的に取り入れられていたが，音楽教師自身からも鑑賞活動を重視しているとの話があった．

(3) 歌唱活動の特徴

この園で指導していた音楽教師は，コダーイのメソードについて学んでおり，実際，歌唱活動ではイタリア地方に伝わる民謡などの古い歌を歌ったり，サイレント・シンギング[4] を取り入れたりするなど，随所でコダーイの教育理念に基づき実践していることが感じられた[5]．友人にもらった歌集などからイタリアのわらべうたなどを自身で収集し，教材として使用しているとのことであった．

図 2．ロダーリ幼稚園にて（右端が音楽指導教師）

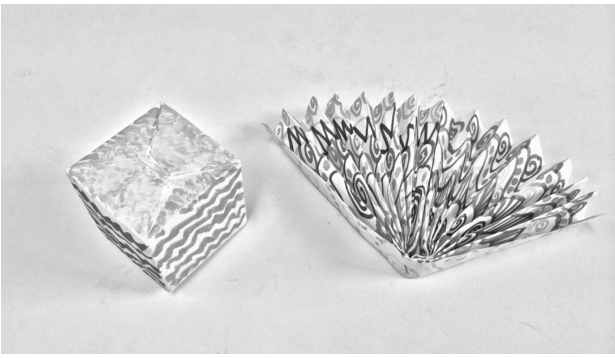

図 3．ロダーリ幼稚園での歌唱活動で使用していた手作り楽器

また，音楽教師が表現した鳥の鳴き声を子ども達が模倣したり，裏声やダミ声，またリップロールやタングロールなどの様々な声で遊ぶという活動も見られた．こういった活動はコダーイのメソードでは見られないが，歌を専門とする彼女独自のアイディアと考えられる．

このようにオノマトペを用いて，子どもから出てくる自由な発想を活かして様々な声の使い方を引き出すという工夫がされており，大変興味深かったが，これについては，近年増えつつある在伊外国人の子ども達の言葉の発達を促すという意図もあると，音楽教師は述べていた．

4）3 園の歌唱活動の特徴

個々に 3 園の音楽活動を見てきたが，いずれの園においても，子どもの自然な声の出し方や歌い方を尊重しており，前述したように「大きな声で」や「元気に」といった音楽教師の言葉掛けを聴くことはなかった．とは言え，決して子どもの歌声に留意していないのではなく，むしろ，どの教師も言葉の韻律であったり，歌声そのものであったりと，子どもの声の在り方にこだわりを持って指導を行っていることが伺えた．その結果，子どもは言葉の響きを活かした自然な声の使い方であるにもかかわらず，無理なく高音域へも換声して歌うことができていた．

また，別の共通点として，どの園の活動についても，差はあれども，コダーイやダルクローズ，そしてオルフなどの教育理念の影響が感じられた．中嶋（1997）によれば，イタリアでも 1970 年代からダルクローズのリトミックに始まり，コダーイやオルフのメソード等が紹介され，特にオルフを中心に，その方法論が注目されたという．また，これらの動きは，その後の学習指導要領の改訂にも影響を与えたという．

フォルティーニ幼稚園とヴィットーリオ・ヴェネト幼稚園で指導を担当していた音楽教師は，特に，これらのメソードを意識はしていないし，それについて詳しく学んだこともないと述べていた．しかし，彼らが行っていた言葉とリズムに着目した指導法や，リズムと身体の動きを連動させた活動などは，ダルクローズやオルフの影響を無視して考えるのは無理があるだろう．今回視察した 3 園の音楽指導教師は，同じ組織に所属しているとのことだったが，先に述べたように，定期的に指導法等について情報交換が行われていることを勘案すると，そういった組織を通してコダーイやダルクローズ、そしてオルフなどの理念や方法論が音楽教師に共有され，幼稚園での歌唱活動にも活かされていると考えてよいのではないだろうか．

2. フィレンツェ市の芸術プログラムと小・中学生対象の音楽の課外活動

1）イタリアにおける小・中学生の課外活動

ここまで，幼稚園の音楽活動を見てきたが，次に小・中学生対象の音楽の課外活動に目を向けてみたい．中嶋（1997）によれば「イタリアでは日本の学校のようにクラブ活動はない[6]」とのことだが，地方自治体等で子ども向けのスポーツや音楽の課外活動を盛んに行っており，学校単位ではなく，地域で次代の文化を担う子どもを育成しようとしていると言えよう．

我々が視察した課外活動は，（1）非営利団体 Nuove Note によるミュージカル公演の練習と，（2）フィレンツェ 5 月音楽祭劇場が主催するオペラ公演の練習，そして（3）非営利団体によって組織された，知的障害を持つ子どものオーケストラの練習の 3 つである．ここでは，（2）のオペラ公演について詳細を見ていくことにする．

2）フィレンツェ市の芸術プログラム

我々が練習を視察したフィレンツェ 5 月音楽祭劇場のオペラ公演は，フィレンツェ市が行っている幼稚園や小学校，中学校向けの芸術プログラムの一環として企画されたものである．フィレンツェ市は幼稚園，小学校，中学校を対象とした芸術・歴史・文化などの鑑賞プログラムガイド LE CHIAVI DELLA CITTÀ を発行している[7]．教育評議委員会が監修した全 5 巻からなるこのガイドは，各分野ごとにプログラムの対象年齢や鑑賞のねらい，解説などが載せられている．タイトルの LE CHIAVI DELLA CITTÀ は「街の鍵」を意

図 4.　LE CHIAVI DELLA CITTÀ 第 1 巻表紙

味するが，副題には「幼稚園，小学校，中学校のためのプロジェクトと行程」と書かれている．なお，本稿では 2013/2014 年度版を参照した．

LE CHIAVI DELLA CITTÀ の中には，全体的なインフォメーション（Informazioni generali）として，プロジェクトの概要および各巻の説明，そして手続等に関する 10 項目が掲載されている．

(1) 各巻の説明

・第 1 巻：プロジェクトとコース形成（全 337 頁）
・第 2 巻：マスターキー　200 日で図書館を巡る（全 52 頁）
・第 3 巻：幼児センター　芸術と歴史，教育とメディア文化共有（全 33 頁）
・第 4 巻：子ども達の博物館　フィレンツェ市博物館，ストロッツィ宮の大庭園，街なかと学校（全 65 頁）
・第 5 巻は，公演予定表　上演場所（全 177 頁）

(2) 手続等に関する項目

各巻の説明に続いて，「形成」「学級への提言」「ウェブサイトでの情報」「1・2・3 巻の同意様式」「4・5 巻の同意様式」「活動の定め」「交通手段」「最終的な書類の提出様式」「教員の為の Q&A」「連絡先」の，手続等に関する 10 項目の内容となっている．

なお「形成」の項には，教育省の法令によって定められている学校が，本プログラムの対象となる旨が書かれている．

3）フィレンツェ 5 月音楽祭劇場のオペラ公演の概要

今回の視察では，《トリスタンとイゾルデ》のリハーサル風景を視察することができたが，これは前項で述べた LE CHIAVI DELLA CITTÀ の第 5 巻に記載されているフィレンツェ 5 月音楽祭劇場とヴェンティ・ルチェンティ社共催のプロジェクト“オペラ，5 月学校”として上演予定であった《パルジファル，聖杯の騎士》から差し替えられたものである．

LE CHIAVI DELLA CITTÀ の公演案内[8] によれば，本公演はフィレンツェ市教育評議委員会，フィレンツェ 5 月音楽劇場財団，フィレンツェ貯蓄銀行財団，ヴェンティ・ルチェンティ社の各団体が協賛になっており，若者や子ども達を対象としたオペラ芸術の振興を目的としているようである．この公演では，児童が合唱を担当しており，歌唱のみならず演技もおこなっていたが，児童たちがオペラに参加することで，オペラや劇場を身近なものに感じてもらうということが，このプロジェクトの趣旨となっている．なお公演は，我々の視察の約 1 週間後の 2014 年 3 月 20・24 日に，普段フィレンツェ 5 月音楽祭劇場の公演が行われている市立劇場の舞台で行われた．

図 5．公演のポスターを絵はがきにしたもの（表・裏）

4）リハーサル風景と合唱の指導体制

我々が見学したリハーサルでは，通常男声合唱が歌い演ずる場面を取り上げていたが，児童達が合唱で歌えるようヴェンティ・ルチェンティ社[7] によって改作されていた．改作にあたっては，物語の骨格である作劇法と音楽を保つように心がけ，オリジナルの歌の世界観を残すようにしたとのことである．合唱を担当する児童達は，本プログラムへの参加を希望する市内の小学校の児童から募る形で募集している．

このオペラの主要な役柄であるトリスタンとイゾルデ役を歌うのは，多くの劇場に出演しているプロのオペラ歌手であったが，ちょうど，この日の練習にも参加していた（図 6）．このような本格的なオペラ歌手と共演できること自体，もちろん貴重な経験ではあるが，指揮者立ち会いのもと主役のプロ歌手 2 人に演出が行われているところを間近で見聞きすることができるという体験は，児童達に計り知れないほどの刺激を与えるものであろう．

また，通常イタリアの歌劇場でのオペラ制作現場では，劇場付きの指導者が合唱指導を行うが，本公演ではヴェンティ・ルチェンティ社の合唱指導者によって指導が行われていた．今回は，普段子ども達にはおそらく馴染みの薄いドイツ語による歌唱であったということもあろうが，この合唱指導者は特に言葉の扱い方に力を入れているように感じられた．例えば，子ども達が十分に歌いこなれていないと思われる箇所を，指

図 6．トリスタンとイゾルデのリハーサル風景

導者がリズムや旋律を少しデフォルメして範唱したものを，子どもに何度も繰り返し模唱させるなどして，ドイツ語のリズムやイントネーションに慣れさせようとする意図が感じられた．

専門的な音楽指導を受けてきたことない子ども達が大多数のようであったが，そういう子ども達に対して非常に的確な指導であると言えよう．劇場付きの合唱指導者ではなく，普段からこのような子どもを対象としたプロジェクトを手掛けているヴェンティ・ルチェンティ社の，子ども達の指導に精通している指導者が指導を担当するという運営方法にも，こういった公演の継続によって生まれた望ましい循環の一端を見ることができよう．

5）音楽に関わるその他の芸術プログラムの例

この鑑賞公演の他にも，LE CHIAVI DELLA CITTÀに掲載されているオペラ，芝居，オーケストラなど，音楽に関わる劇場と公演情報を幾つか挙げておきたい．

表：音楽に関わる芸術プログラムの例

劇場・団体名	公演内容	対象年齢	1名あたりの入場料
リフレーディ劇場 Teatro di Rifredi	主に芝居を中心とした劇場で，その公演の1つに，「ジャン・ブラスカの小新聞社」がある．	6～10歳	5ユーロ
トスカーナ・オーケストラ財団 Fondazione Orchestra Toscana	このオーケストラは，フィレンツェのヴェルディ劇場を中心に公演を行っている．公演の1つにバレエ音楽の「ロミオとジュリエット」がある．	4～12歳	5ユーロ
プッチーニ劇場 Teatro Puccini	主に芝居とミュージカルを中心とした劇場で，その公演の1つに「オズの魔法使い」がある．	6～14歳	5ユーロ50セント
フィレンツェ5月音楽劇場 Teatro del Maggio Musicale Fiorentino	前項でオペラの例を取り上げたが，バレエも上演している劇場であり，その例としてはアダム作曲のバレエ「ジゼル」がある．	全年齢	平戸間席：15ユーロ／桟敷席：10ユーロ
フロリダ作業場劇場 Teatro Cantiere Florida	この劇場は，主に芝居を中心とした劇場で，その公演の1つに「世界を救う」がある．	6歳以上	5ユーロ
ガッロ小劇場 Teatrino del Gallo	人形劇や芝居を中心とした劇場で，その公演の1つに，「古い農園」がある．	3～6歳	5ユーロ

このように，多くの公演が5ユーロ（日本円にして約700円）程度の非常に安価な入場料を設定している．劇場の大きさにもよるが，1公演につき2つの学校が鑑賞できる設定になっている．

まとめ

今回の視察では，3園の幼稚園での音楽活動と，主に児童を対象とした課外活動における歌唱活動の実態を見ることができた．これらの歌唱活動から共通して感じられたのは，子どもの持つ自然な声と，イタリア語の言葉の響きやリズムを活かそうとする指導者の姿勢であり，と同時に，その先に音楽という芸術への道筋を見据えているという点である．

ここで視察した幼稚園での活動を振り返ると，音楽指導教師は子どもの声が小さいからといって（海外から我々が視察に来ているという状況であっても），何とか歌わせようと子ども達を煽ることはなかった．異年齢の子どもによって編成されたクラスにおいては，活動にも慣れていて歌も良く覚えている年上の子どもがリードして歌い，その声を聴きながら年少の子どもが，覚えているところから口ずさみ始める，といった歌の伝承の形態が見られた．確かに音楽指導教師が指導する音楽活動の時間という枠組みの中ではあるが，ここには，ごく自然な文化の継承の有り様が見えてくる．

また，言葉の響きやリズムに配慮した指導からは，言葉が音楽という芸術文化にも直接結びつくのであり，言葉の響きやリズムに対する感覚を培うことが，将来，社会そして文化を担う子ども達にとって大きな意味を持つのだ，という教育理念が感じられる．

今回，我々が視察で目にし耳にした歌唱活動の個々の内容や方法については，様々な状況の違いもあり，一概に我が国の教育実践にそのまま適用できるものではないだろう．だが，その教育理念については，子どもの声を育てていく上で，大きな示唆を含んでいるものと確信する．今後は，本調査で得られた示唆を，我が国における子どもの声を育てていく教育実践を具体化する過程で生かしていきたいと考える．

【付記】本調査は，JSPS科研費24531192の助成を受け実施したものである．

註

1）　中嶋（1997），p.136.
2）　イタリアにおける教育の管轄は，教育省（Ministero dell'Istruzione, dell'Università e della Ricerca，略してMIUR.）である．なお，同年齢の子どもが通うAsilo materna も幼稚園に近い施設だが，乳児を対象としたAsilo Nido は日本の保育園に相当すると考えられる．
3）　幼稚園での安全を確保するために，フィレンツェ市

では幼児のプライバシー保護が徹底されており，我々に対しても事前に注意喚起があった．幼児への写真撮影，録音，録画等，人物が特定される危険性があることに関しては，保護者の許可が必要となる．これはフィレンツェ市特有のことではなく，イタリアの他の州でも同様であり，入園・入学の際に，保護者と幼稚園・小学校側とでプライバシー保護の書類の取り交わしが行われているとのことであった．その背景には幼児・児童を狙った誘拐等の犯罪の増加があり，イタリアでの危機意識の高さを直接感じることができた．

4） サイレント・シンギング：声を出さないで，頭の中で歌うこと．日本語では「心唱」とも呼ばれる．音感を養うことをねらいとして，コダーイのメソードではしばしば用いられる．

5） コダーイ・ゾルターン（Kodály Zoltán）は，ハンガリーの作曲家，民族音楽学者であったとともに，その独自の音楽教育メソードでも知られている．

6） 前傾，中嶋（1997），p.130.

7） http://www.chiavidellacitta.it（最終閲覧日：2014 年 9 月 28 日）

8） Comune di Firenze, Assessorato all'Educazione（2013），p.50.

9） この公演の演出と合唱指導を行っていた．ヴェンティ・ルチェンティ（Venti Lucenti）社は，劇場でのプロフェッショナルとしての経験を持つスタッフにより，文化と育成，そして社会と劇場とを結び付けることを目的として，1993 年に設立された．

引用文献および参考文献

大内愛（2012）：イタリアの小・中学校における音楽科教育の変遷．広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部 第 61 号．pp.333-342.

中嶋俊夫（1997）：第 3 章 音楽教育における諸外国の動向 第 6 節 イタリア．音楽教育論－子供･音楽･授業･教師－，小原光一・山本文茂監修，教育芸術社．pp.128-137.

Comune di Firenze. Assessorato all'Educazione（2013）：*LE CHIAVI DELLA CITTÀ*.

Ministero dell'Istruzione, dell'Università e della Ricerca（2000）: Decreto Ministeriale 10 luglio 2000, n. 177.